夏月と冬太の執筆風景

一之瀬六樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏月と冬太の執筆風景

【Ｎコード】
Ｎ９２９３Ｚ

【作者名】
一之瀬六樹

【あらすじ】
文芸部に所属する男女の会話を通して小説の書き方について学ぶラブコメディ。毎日更新して年内に完結までもっていく予定ですが、更新ごとに再評価していただけると嬉しいです。

その1　『プロット』

「ふと、何か小説を書きたくなる夜があるんだ！」
夏月は机を叩いて僕にそう訴えた。
「書けばいいじゃないか」
そう答えてやるが、夏月は首を横に振る。
「でも書くネタがないんだよっ！」
「じゃあ別に書かなくてもいいんじゃね？　意味がわからんぞおまえ」
「冬太なんぞには私の気持ちはわからんさ！　趣味で書いているだけの冬太にはなっ！」
僕は書きたいものがあるときだけ書く。それ以外はこうして文芸部の部室で、コーヒーを飲みながら夏月と駄弁って過ごしていることが多い。
夏月は長い黒髪をかき乱して続ける。
「書きたくなるといっても、それは半ば義務……！　一種の強迫観念みたいなものだ！　私のようにプロの作家になることを目指して新人賞に作品を送っていながら長年選考途中で落とされまくっている者にとって、作品を書いているのに世の中に作品を発表しないでいるという状況はなんか焦るんだよ！　物書きとして自分は何もしていないような気分になってしまうんだ！」
「だから、ふと小説を書いて発表したくなるってのか？」
「そのとおり！」
「でも発表なら年に数回も文芸部で部誌作って出してるだろ」
「あんなんじゃ全然足りないんだよぅ！　プロは日本全国に自分の小説を発表してるんだっ！　そもそも部誌なんて誰も読んでないじゃん！　無理やり配ってもゴミ箱がとんでもないことになっちゃうし！」
「じゃあ、ネットで発表でもしたら？　全国どころか世界中に発信

できるぞ。おまえの小説」
「そりゃ発信はできるだろうさ！　インド人に日本語で書かれた小説は読めないだろうがな！」
「まあそりゃそうだけど」
なんで数ある国の中からインドが出てきたんだろ。
そんな些細な疑問はスルーして、夏月は額に手を当てながら嘆く。
「それに長編小説は新人賞に送るから、基本的にネット上にアップロードすることはできないんだ。いや厳密にはできるしそうした作品が大賞を受賞した例もあるけどさ、一度でも外部に公開した作品は受け付けないというレーベルもあるわけで、だったらできる限り公開しないままでいたいじゃないか！？」
両手を使って僕に同意を求める夏月。
「情けないくらいケチな考えだな。つうかそりゃおまえのワガママだろ？　自分で公開しないことを選んでおいて、作品を何も公開してないから焦るだなんて言うなよ……。ていうか新作書け。それで万事解決だ」
「それはムリ」
「なんでよ？」
「最初に言ったが、そもそも一本の長編小説を組み立てられるようなネタがない」
「話にならねぇ……それで作家志望のつもりかおまえ？」
「い、いや、違うんだ！」
僕の批判を必死になって否定する夏月。
「りょ、良質のプロット、物語の設計図を組み立てるのは並み大抵のことじゃない。場合によっては小説そのものを書くよりも時間がかかってしまうんだ」
なんか言い訳くさいなぁ……。
「冬太。何か言ったか？」
「いえ何も」
「まあいい。話を続けるぞ――。さっき私はネタ出しとプロットを

ごっちゃに話したが、この二つは厳密には別個の作業だってことを冬太は知ってるか？」
「ええと、ネタ出しは言い換えれば設定資料集を作る作業で、そうやってネタ出しをしてから、そのネタを活かせるように物語を組み立てるのがプロット……で、合ってるか？」
「そう。私だって、設定やアイデアの引き出しがまったくないわけじゃないんだゾ？　でも、言ってみればどれも短編向きの一発ネタだ。長編を一編書ききるには、そういうネタをいくつも組み合わせて、より大きな物語の流れをつくらなければならない。ネタや物語の取捨選択をして、本気で無駄のない構成の話を作るためには、プロットは絶対に必要だというのが私の持論だ。そうやって新人賞に送るためのプロット一つ作るのさえ苦労するのに、その場の思いつきでささっとネタを組み立てるなんてムリムリ。ネタがもったいないし」
「でも僕は、プロットなんか作ったことがないぞ？」
「それは冬太が短編やショート・ショートしか書いてないか、あるいは長編でも、最初から頭の中である程度のプロットができあがってるんだろう」
「そういうもんかなぁ……自覚はないんだけど」
プロットをがっちり作るだけあって、たしかに夏月は物語のまとめ方が得意だ。伏線を上手くばらまいたりしていて、無駄なシーンが一切ない。
でも夏月の小説は、ちょっとカチコチに固まりすぎだ。
ラノベは芸術じゃなくてエンターテインメントなんだから――もう少しくらい、無駄なシーンがあってもいいんじゃないかと僕は思う。
「夏月も一回くらい、プロットを立てずに書いてみれば？」
「それはもうやった。すくなくとも私の場合、プロットの無いまま長編小説を書くのはかなりの博打だ。そういうことをするとまた、ｔｘｔ形式の未完成の小説がｎｏｖｅｌフォルダの中にいくつも並

んでしまうことに」
「さいですか」
ご愁傷さま。
「じゃあアレだ。ラブコメ。どこにでもありそうな可愛い女の子とアレコレするだけの話なら比較的楽に作れるんじゃないか？」
「冬太は甘いな。あまあまハニーのようだ」
「なんだそれ」
「特に意味はない――いや、実際に書こうとするとラブコメだって決して馬鹿にできるものではないんだぞ？　ストーリーが単純なぶん、キャラやギャグに気を遣うはめになる。どこにでもあるラブコメを書くのであればそもそも書く意味がないから、何かしら際立った特徴を付けなきゃいけないんだ」
「難しいな。半分くらいおまえの泣きごとのように聞こえるけど」
「冬太はあんまり読者ウケとか考えないからな。こういうことはあんまり考えたことなかったんじゃないか？」
「そうかもな」
「私のように作家を目指している者は、新人賞に送るために小説を書く。だが小説を書き始めた頃は自分の書きたいものを書きたいように書いているものだ。かつては私もそうだった」
「いきなり自分語りか」
「う、うるさい……！　チラシの裏に書くだけじゃ寂しいだろ！」
「いやまあ、聞いてやるけどさ」
「じゃあ続ける……。まあつまり、自分の書きたいように書いているとだな。一部の天才を除いて、そういった小説は必ずと言っていいほど他人にとっては面白くないものとなるわけだよ。――そう、そうれはたとえば素人がカラオケで気ままに歌うのに似ている。ストレス発散や自己満足のために自分の声質や音程を気にすることなく歌うのだから本人は気持ちよく歌えるが、音楽という洗練された一つの芸術作品としては聞くに堪えないものになってしまう」
「それ、遠まわしに思うように書いてる僕の作品を馬鹿にしてるだ

ろ」
「馬鹿になどしてない！　冬太の小説は私は好きだぞ？　どうしても心のどこかでウケ狙いになってしまう私の小説と違って、冬太の小説にはパワーがある。作品を読めば冬太が何を書きたかったのか伝わってくるよ」
「……褒めても何も出ませんが」
「まあまあ、照れるな冬太！」
「て、照れてねぇよ！」
「そうか。実は私もあんまり褒めてない。冬太の小説って結局はくだらん自己満足になってることが多いからな」
「なんだそりゃ！　やっぱバカにしてるじゃねーか！」
喜んで損した……ッ！
「だから馬鹿にはしてないと言っているだろ。自己満足――結構なことじゃないか。厨二病ってラノベ書くには最大の武器だぞ？」
「もうやめてくれ……」
「私の作品は誰も読まない。でも冬太の作品には一部のファンがついている。厨二病のファンが」
「だからそこを強調するなよ！　わざとか！」
「いや、これは結構本気で褒めてる。いいよな、冬太にはちゃんとファンがいて。私の小説なんか、読者ウケを気にするせいでに実は誰のウケも取れていないという無味乾燥なものになってしまっている。これでは誰得小説だ」
「……おまえの小説だって、楽しみにしている読者はいるよ」
「ふん。根拠のない慰めならいらないぞ？　そんなことしてもらわなくても、私はいつか作家になって――」
「バカ。僕がその読者なんだよ」

その2　『キャラ』

ある日いつものように文芸部の部室でコーヒーを飲みながらマンガ雑誌のページをめくっていると、夏月がえらく不機嫌な様子でドアを開け閉めして入室してきた。
「おはよう！」
「……ああ、おはよ」
今は放課後で朝ではないのだが、部室で会うときはこの挨拶で定着している。
「おい冬太！　なんか私に言うことがあるんじゃないか？」
「特に無いが、強いて言うなら髪型が変わってるな」
普段は黒髪をまっすぐに伸ばしている夏月だが、今日は頭の上でツーテールに結んでいる。
「ほう。やはり気がついたか、さすが冬太だ。それで、この髪型の感想は？」
「結構似合ってるな。可愛いぞ」
「な……っ！」
夏月の顔がみるみるうちに紅潮していく。
「な、なにを恥ずかしいこと言ってるんだこのバカ！」
「正直に答えただけでバカ呼ばわりはないだろ」
「だ、だからこれ以上私を辱めるなってば……っ！」
「いつ僕がおまえを辱めたよ」
おそらく夏月は人から褒められることに慣れていないんだろう。
「ふ、ふんっ！　冬太が変なことをいうからいきなりトップギアに入ってしまったではないか！」
「はいはい。んで、面倒くさがり屋のおまえがわざわざ髪型を変えるなんて、どういう風の吹きまわしだ？」
「そうだ。それが本題だった。冬太のせいで赤面しつつ帰るところだった」

夏月は気を取り直して、座っている僕の目の前で腰を屈め、目線を僕に合わせてこう尋ねた。
「どうだい冬太？　今の私はキャラが立っているかい？」
「――は？」
「だから、他のキャラクターとカブっていやしないかと聞いている」
「髪型が？」
「それも含めて全体的に」
「なんで急にそんなことを気にするんだ」
「よくぞ聞いてくれた」
夏月は姿勢を元に戻し、ふんぞり返って腕を組む。
「実はだな、昨日読んだライトノベルに出てきたヒロインのキャラが、私とカブっていたんだ」
「どんなところが？」
「ほぼ全部」
そんな馬鹿な……ドッペルゲンガーじゃあるまいし。
「私だって驚いたぞ。黒髪ロングだけでなく高慢ちきな喋り方までそっくりだったんだ」
「自分が高慢ちきだってことは自覚していたのか」
「いや、だって私は作家志望だぞ？　作家は夢を与える職業だ。その作家に自信が足らなくてどうする！　冬太はなよなよした心配性のピーターパンと一緒に空を飛べる自信でもあるのか！？」
「空を飛ぶなら、心配性な技師が整備して慎重なパイロットの操縦する飛行機に乗った方がずっと安心できるだろ？」
「くっ……。そういう屁理屈を言っているから貴様は女の子にモテないんだ！」
「余計なお世話だと思う」
「クソッ、話が進まん。とにかくだな、そのラノベに出てきたキャラクターと私はキャラがカブっているようなんだ。でも性格は今さら変えられないから、見た目を変えることにした。それでこの髪型だ。黒髪ツインテール」

「なんで小説内のキャラクターとのキャラかぶりを気にする必要があるんだよ」
「だって私は作家志望だぞ？　作家は個性的な物語を生みだす職業だ。その作家に個性が足らなくてどうする！」
「その理屈はもういい」
「そういう冬太も男主人公だからって無個性でいていいわけじゃないんだぞ？　最近の主人公はやたら熱血だったりやたら不幸体質だったりやたら右手が幻想をぶち殺したりするんだからなっ！」
「それ全部同じ作品の主人公だろ」
「だいたいな、こうやって部室の中で駄弁ってるだけの構成も新しくもなんともないんだぞ！　もっともあちらは生徒会室だがな！」
「おいおまえさっきからメタ発言の連発やめろ！」
「それだけじゃないぞ！　ラノベを書くことそのものを題材に扱ったラノベだって『ライトノベルの楽しい書き方』や『ラノベ部』ですでに出版されている！」
「だから言わなきゃわかんないようなことわざわざ言うな！」
「ふん……読者をナメるなよ冬太？　彼らの中には私やおまえよりもよほど多くのラノベを読んでいる連中もいるんだぞ。こんなものは一目見ただけでパクリ小説として断罪の刑だ！」
夏月こそ、もっと読者のおおらかな心を信頼したらどうだろう。
「夏月。カブりを気にしてちゃ何にも書けなくなるぞ」
僕がそう言うと、夏月は「うっ！」と胸を押さえる。
「……ま、まあな。一人の物書きとしては自分の才能を信じてそれを否定したいところだが、人間の思考パターンなんてものには限界があるわけだ。一人の人間が何千人と言う小説家とまったくカブらない話をいくつも思いつくはずがない。あんまり斬新なものだと読者がついてこれなくて、冬太の自己満厨二病小説のようになってしまうし」
まだそのネタ引っ張るつもりなのかおまえ。
「いくら他人とまったくカブらない小説は無理でも、そのままパク

るのはやめろよ？　やっぱり作者のオリジナリティがあるから小説は面白いんだからさ」
「冬太ってたまに格好いいことを言うよな。さすが厨二」
「なんでおまえはひと言多いんだよっ！」
「……とにかく、これから私はツインテールでやっていくことにする。ふふ、これで私も萌えキャラの仲間入りだ！　金髪ツインテールなら腐るほどいるが、黒髪ツインテールは新しいだろう！」
　両手を天（部室の天井）に掲げる夏月。
「夏月――それなんだけどな」
「な、なんだ？」
「黒髪ツインテールは、『あずにゃん』みたいだって言われるぞ」
「な……！　なんだとっ！？　じゃあツインテールを輪っかにしてイカリングみたいにすれば――」
「それは某１８禁のゲームに登場するキャラの代名詞だ。他にはピンクの探偵も愛用していたっけ？　しかも、奇抜な髪形なぶんパクリ度が増してる……」
「八方ふさがりじゃないかっ！」
「まあ僕は、どんな髪型してる夏月も好きだけどな」

その3　『作風』

文芸部の部室に入ろうとした瞬間から、ぴりりとした空気の緊張を感じていた。
思えばそこで踵（きびす）を返し、家に帰ってしまえばよかったのだ。
しかし愚かにも僕は普通に入室してしまった。そして今この状況である。
「さぁっ！　私のラノベを読め冬太！」
「ヒナの小説を読んで！　お兄ちゃん！」
僕に向かって原稿を差し出す夏月と、初等部の制服を着た幼い少女。
セミロングの髪はなぜかピンク色。その名は日奈子。――足が宙に浮いている。
「冬太のスケジュールは本日脱稿した私の原稿を読む予定でいっぱいだ！　小学生の作文なんぞに目を通してい暇はない！」
歯をむき出しにして女子小学生を威嚇する夏月。
「作文じゃないもん！　小説だもん！」
年上の女性は恐いだろうに、精一杯の抵抗を示す日奈子。
「お兄ちゃんは前からヒナの小説ができたら一番最初に読んでくれるっていってたもん！　それなのになによ！　このオジャマ虫！」
「オジャマ虫は貴様だ！　どっからわいて出たこのゴキブリ！」
「ゴッ……！？」
日奈子の頭部からは二本の長いアホ毛が飛び出している。夏月はそれを揶揄してゴキブリと呼んだのだろう。
しかし、幽霊とはいえ女の子相手にゴキブリはひどいと思う。
「ゴ、ゴキブリじゃないもんっ！　ヒナはヒナコだもん！」
「な～～～～にが『ヒナはヒナコだもん！』だっ！　貴様のように自分のことを名前で呼ぶような女にはロクなのがおらんのだ！」
「なによそれ！　ヒナの名前がカワイイからってヤキモチ焼いてる

んでしょ！？」
「バカ言え！　私の名前だってじゅうぶん可愛いさ！　なあ冬太！？」
「――って、そこで僕に振るのか？」
夏月……ナツキ……なつき。
うーん、悪いけど普通だ。ちょっと男みたいだし。
「夏月の名前は別に可愛くないが、夏月は可愛い」
「ちょ……！　お兄ちゃん……！？」
「な――――ななななな？？？」
夏月の顔が一瞬で真っ赤に染まり、頭頂部から湯気が立ち昇る。
「――ひ、ひきょうだぞ冬太！　不意打ちでそういうことを言うなんてっ！」
顔を背け、両頬に手を当てる夏月。
「前フリをしておけばよかったのか？　それじゃこれから僕が夏月の可愛いと思うところをリアルに３０個くらい述べるから、今のうちに心の準備をしといてくれ」
「わ、わかった！　私が悪かったからやめてくれっ！」
そっぽをむいたまま手だけをこちらに伸ばし、僕に制止をかける。
「冬太にそんなことをされたら――私は恥ずかし死ぬっ！！」
「そんなにイヤなのか」
「イ、イヤじゃない。イヤじゃないんだが……恥ずかしいんだ……っ！」
ちなみにこういうところが可愛いと僕は思う。
「……ねぇお兄ちゃん。この人お兄ちゃんの……恋人？」
夏月が深呼吸をしているのを指差して、日奈子がそう訊ねてくる。
「いや。同級生の部活仲間」
「でも……怪しい」
ジト目で睨まれるが、事実なんだからしょうがない。
「わ、私も冬太に聞きたいことがある――こ、このゴキブリ幼女は何者だ！　貴様に妹がいただなんて設定、私は聞いていなかったぞ

！」
「設定とか言うな」
「それに何だこのピンク色の髪の毛は！　こんな髪色して外を歩いている小学生がいるかボケッ！」
「そんなのラノベやアニメではよくあることだろ？」
「阿呆！　現実とフィクションの区別くらいつけろ！」
まさか夏月にそれを言われるとは。
「ちょっとあなた！　さっきからヒナのことバカにしすぎよ！　いったいヒナに何の恨みがあるの！」
「ええい黙れ黙れこのブリッ子がぁっ！！　私はな、貴様のようなテンプレキャラが大っっっ嫌いなんだ！！」
「テ――テンプラ！？」
「リアル小学生でも使わないような幼児言葉で幼さをアピールし、無条件で兄のことを好いている妹キャラ！　それをテンプレと呼ばず何と呼ぶ！？　あと天ぷらじゃなくてテンプレ！　テンプレートをそのまんま使った、何の工夫も面白みも無いキャラのことだ！！」
「え……ヒナって、そうだったの？」
「流されるな日奈子。そもそもおまえは僕の妹じゃないだろ？」
まあ、兄のことが大好きな妹キャラってのも悪くないが。
「な、何だと……？　でもだって、さっきからコイツはお兄ちゃんお兄ちゃんと連呼しているじゃないか！」
「このくらいの子供にとって年上の男は皆おじさんかお兄ちゃんなんだよ。こいつと僕はまだ知りあって日が浅い」
「ヒナ子供じゃないもんっ！」
「だからそのブリッ子をやめろ！　今すぐにだ！」
「……ヒナこのお姉ちゃんキラ～イ」
「夏月、相手はまだ小学生だぞ？　ちょっとは手加減してやれよ」
「――ふん。冬太は甘すぎるな。まるでザラメたっぷり長崎カステラのようだ」
「美味いよなアレ」

「そんなことはどうでもいい。こいつがこの場にいることで、会話文の中身が誰のセリフだかわかりづらくなってることのほうが問題だ」
「おまえは何を言っているんだ」
「そこで小説では誰のセリフかわかるように地の文でフォローを入れるのが基本だが、そのせいで会話文のテンポが悪くなることに冬太は気付いているだろうか？　いや、気付いてはいない！」
「でもそういう夏月のラノベにだって三人以上のキャラが出てるだろ？　キャラが二人しかいない小説ってのも面白いとは思うがなんか寂しいし、キャラは多い方が楽しいじゃないか」
「べつに私だってキャラクターは二人までしか許さんと言っているわけではないさ。でも、同じシーンに沢山のキャラクターを登場させるとわけわからんことになりやすい」
「なるほど。今回のテーマはそれか」
「これってテンポを重視するコメディ・ギャグのジャンルでは重要なことなんだぞ？　いかにテンポを壊さず三人以上を喋らせるか、作者の力量が問われる場面でもある」
「たとえば？」
「会話文の中に誰がしゃべってるかわかるような要素を必ず入れるように工夫するんだ。簡単なのは一人称だな。私は自分のことを『私』と呼ぶし、あのゴキブリは自分のことを『ヒナ』と呼ぶだろ？　これらの一人称が入っているだけで読者には誰のセリフだかわかるはずだ」
「だけど『私』なんて使うキャラはいっぱいいるだろ？」
「そういう場合は口調を工夫すればいい。語尾に特徴をつけるのもいいな。『～イカ！』とか『～ゲソ！』とか」
「ものすごくマニアックな語尾を例に出したなおまえ」
「個性的だと言ってくれなイカ？」
スルーしておく。
「ところで――さっきから日奈子が一切喋ってない気がするんだけ

ど」
「ああ、それなら私が口を塞いで黙らせている。これなら喋らなくても不自然ではないはずだ」
「今すぐやめてやれ！」

◆

閑話休題。ここいらで僕と日奈子の関係について説明しておこう。
あの日はたまたま夏月が委員会の仕事で忙しくて、放課後になっても文芸部の部室に来なかった。
夕日の差し込む部室――僕はパイプ椅子に座って、冷めたコーヒーをすすりながらたった一人きり図書館で借りたＳＦ小説を読み進めていた。
頭の中でもう夏月は来ないだろうと思いつつも、なかなかこの場を離れる気にはなれない。分厚いハードカバーの大長編もいよいよ佳境に入り、もう少しで読み終えるところだ。
そんなときだった。透明感のある少女がふわりと部室のドアをすり抜けて、中に入ってきたのは。

初等部の制服に身を包み、風の吹かない室内で柔らかなセミロングの髪の毛を重力に逆らわせて、ふわふわと宙に浮いている女の子。きょろきょろと部室の中を見回したあと、その顔は僕の方を向いて止まった。
「……」
見てはいけない。彼女と僕は、違う世界の人間なのだから。
ＳＦ世界への興味は彼女がやってきたことですっかり削がれてしまった。しかし僕は小説を読むことに没頭しているふりをして、彼女を見ないようにする。

――放課後になると学園中を徘徊する、謎の幽霊少女。
彼女の噂はこの春から広まり始め、僕の耳にも届いていた。
だがまさか、こうして目の前に現れるとは。

「……」
少女はしばらくそうして僕を見ていた。
もしかしたら、僕が？見えている？ことに気付いているのかも知れない。
それでも僕は知らん顔をして小説のページをめくる。
内容なんてまるで頭に入ってきてはいない。
「……っ」
やがて待っていても何の反応もないことを悟ったのか、少女は失望した表情で、気だるそうに身をひるがえす。
そして入って来たのと同じようにふわりと浮きあがり、ドアから部屋の外へ出ようとしていた。
それは見ていて可哀相なくらい、寂しそうな素振りだった。
「……待てよ」
僕はその小さな背中を呼び止める。
「何か、言いたいことがあったんじゃないのか？　僕でよければ聞いてやるけど」
口を突いて出てきたその言葉。
幼い少女は、ゆっくりと僕を振り返った。

「お兄ちゃん――ヒナが怖くないの？」

驚きと、不安の入り混じった表情を浮かべている半透明の少女。
「へっ……幽霊が怖くて作家がつとま「長いわド阿呆っ！！！！！！」」

夏月の恫喝により、僕の回想はスキップされる。
「何なのだこのマジメっぽい語り文は！？　背中がかゆくなってくるぞ！」
「日奈子の件は話すと長くなるんだよ」
「そうよそうよ！」
「ああそう。じゃあべつに話さなくていい。興味ないし」
夏月はよほど日奈子のことが嫌いらしい。
「――もういい。ゴキブリの存在は忘れよう。冬太はただ、出来上がった私のラノベを読んで感想をくれたらそれでいいんだ」
「ちょっと！　お兄ちゃんはこれからヒナの小説を読んでくれる予定なのよ！？」
「アーアー聞こえな～いっ！！　……はい冬太っ！　私の原稿だぞ☆」
近年まれにみる夏月の笑顔と共に、手渡されるラノベ原稿。
これはまずい。今回のは相当の自信作のようだ。
嫌な予感しかしないが、僕としては夏月の作品を読まないわけにもいかない。

『タイトル　俺の灼眼妹がとある戯言遣いとテストと召喚獣の憂鬱』
嫌な予感的中だった。

『今日は待ちに待ったバイトの給料日。これで牛丼が食べられる。
部活が終わると私はすぐにコンビニに行き、ＡＴＭからお金を引き出した。

１０５円の手数料を取られてしまったが牛丼を食べる悦びには代えられない。
そのまま意気揚々とスーパーへと駆け込み、玉葱と紅生姜と牛バラ肉を買った。
やった！　これで牛丼が食べられる！　私は家路を急いだ』

主人公の牛丼への愛が読者に伝わってくる導入部である。
実は庶民的な描写を入れることで、読者と主人公の距離を近付けるという狙いがあるのかもしれない。

『家に帰ると、玄関の鍵が開いていた。
おかしい。家族はまだ仕事から帰っていないはず。
不審に思いながらも私は家の中に入り、鍵をかける。
そしてダイニングキッチンに入った途端、私は強盗から包丁を突きつけられた。
「金を出せ」』

開始数行から急展開だ！
いや、読者の興味を早めに引き付ける小説のテクニックとしては正しいのだが……やりすぎだろう。

『私は困った。
金を出せと言われても、今月のバイト代はすべて牛丼の材料に使ってしまったのだ。
「お金などありません」
正直に申告すると、強盗は「ならば殺す」と言ってきた。
「わかりました。でもとにかく牛丼を作らせてください。それだけを楽しみに買い物から帰ってきたんです」
強盗は五秒くらい考え込んだあと、こう答える。
「わかった。ただし、俺のぶんも作ることだ」

「いいでしょう。材料は四人前あります」
「四人家族なのか？」
「いいえ。私と、私と、私と、おじいちゃんのぶんでした」
「じゃあおまえが二人前で、俺とじいさんのが一人前だ。いいな？」
「いいえ。おじいちゃんのはこの際諦めます。私と私と私と、あなたのぶんで四人前です」
「それではじいさんが可哀相だろう。俺のはいいから、じいさんのを残しておいてやれ」』

「……いい奴だなぁ」
でもさすがにシュールすぎる。このノリがあと数百ページも続くのか。
「なあ、夏月」
「なんだ冬太？」
「このラノベはどういうジャンルなんだ？　ギャグ系か？」
「学園熱血異能バトル料理魔法少女ファンタジーラブコメ。ちなみにセカイ系」
「……要するに早口言葉か」
「ふっ……今は学園と料理の要素しか出てきていないから、この作品の魅力がわからないのも無理はないな。しかし最後まで読み進めれば冬太も感涙にむせぶこと間違いなしだ！」
腕を組み、高らかに笑う夏月。
「なにせこいつはラノベとしての売れ線をすべて注ぎ込んで造られた、私の最高傑作なのだからな！」
――違う。これを最高傑作だなんていう甘っちょろい言葉で片付けられるはずがない。
これぞまさしく、ウケ狙いを詰め込みすぎて倒壊することが義務付けられたバベルの塔。
僕は夏月にある種の才能を垣間見た気がした。

「お兄ちゃん！　ヒナの小説もよんでよんで！」
今度は日奈子から無理やり原稿を手渡されたので、僕はそちらに目を向ける。

『タイトル　　ヒナとお兄ちゃんの子ども』

「やばすぎるだろ！」
「え？　ヒナの小説そんなにヘンだった？」
「冬太……。私のいない部室で、このゴキブリと何があった……？　詳しく吐いてもらおうか」
僕の背後で一気に放出される怒りの闘気。
「もうこれはタイトルからして駄目だ！　日奈子には悪いけどこれ以上は読めない！」
「そ、そんなっ！　お兄ちゃん――！？」
「それよりはっきり宣言してくれ、日奈子！　この作品は私小説でもドキュメンタリーでも実話を基にしたケータイ小説でもない、完全なフィクションだと！　頼む！！」
「え？　なんで？」
「早くっ！」
「えっと……『このお話はフィクションです』」
「――なんだ。作り話だったのか」
夏月の周囲から空間のゆがみが消え去り、文芸部室はもとの平和な世界へと回帰した。
「でもダメだぞ冬太？　作品は小説家の魂だ。いかにゴキブリの書いた駄作であったとしても、きちんと最後まで読んでやれ。こいつは冬太に読んでもらうために頑張って作品を書き上げてきたのだろうからな」
「あ、あんたって……本当はイイヤツだったりする？」
「なんだ今さら気がついたのか？　まあいい。これだけのボリュー

ムを手書き原稿で完成させる熱意……私も貴様を見直した。これからはゴキブリではなくゴキちゃんと呼んでやる」
「あ……ありがとう」
二人の間に友情が生まれた瞬間だった。
「そういえば、お兄ちゃんはどういう小説を書いてるの？」
「なんだゴキちゃんは知らないのか？　まさにこういうのだ」
夏月は戸棚から僕の原稿を取り出して、勝手に日奈子に見せる。

『タイトル　深淵の魔導士ファシオス
「まいったな……。まさか噂の古代魔導士殿に狙われるとはよ」
鬱蒼とした大森林アルガヘイズ――その奥地に、ソレは突如として君臨した。
「ふっ……、知っているのか。オレも有名になったものだ」
銀髪を魔界の旋風≪かぜ≫に棚引かせながら、ファシオスは身の丈の二倍程の愛槍――グングニル百式を縦に構える。
「喜べ。貴様で一万人目だ。――オレに一瞬で殺されるのは」
「ぬかせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」
己の体躯を鋼鉄に変え、音速をも超える速度でファシオス目掛けて突進する大男。
「だが――哀しいな。記念すべき一万人目がこんな単細胞とは」
ファシオスは身動ぎ一つせず、ただ標的≪ターゲット≫に向かって嘲笑の笑みを浮かべる。
「……まあ、恐怖のあまり逃げ出した九千七百二番目の奴より数倍マシか」
宇宙≪そら≫に向かって高く槍を掲げる深淵の魔道士。
「呻れ闇の鼓動！　十字星≪クロス≫の力よ！！　真の姿を我が前に示せ！！！　グーングニル！！！！！」
――刹那。雷撃がアルガヘイズの森全体を包む。
「ぐぎゃあああああああああああああッッッッッ！！！！！

！」』

「このファシなんたらって奴すごいな！！　敵が目の前から音速を超えるスピードで迫ってきているというのに、あれだけ無駄口を叩く余裕があるなんて！」

嫌味ったらしい感想を述べる夏月。

「それにこのグーングニル百式の威力！　森にいた善良な野生動物たちは全滅だな！！」

「……これが……お兄ちゃんの書いてた小説……？」

「その通り。あまりのクオリティの高さにゴキちゃんもびっくりしただろう？」

「……うん……びっくり」

日奈子は（なぜか）放心状態だった。

「……なんかもうどうでもいいや……。……ヒナ、もう成仏する」

「ええっ！？　それはいかんだろ！　まだゴキちゃんは幽霊キャラとして現世に何の未練があったとか、そういうフラグの類いが未消化のままじゃないか！　それなのにもう逝ってしまうと言うのか！？」

「うん……ありがとう、お姉ちゃん。そしてお兄ちゃん。つかの間の夢をくれて、ありがとう……」

冗談かと思ったが――光の粒に包まれて、そのまま昇天してしまう日奈子。

「どうしてこうなった」

唖然とする夏月。

「顔見知りに原稿を見せるのは慎重に、ってことだろ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9293z/

夏月と冬太の執筆風景

2011年12月29日06時45分発行